

# 「二十四孝」朱寿昌の刺血写経

— 事実と虚構 続 —

坪井直子

〔抄録〕

宋の朱寿昌は、幼いころに離ればなれになってしまった母に会うために、官位を棄て家族とも別れて母親を捜す。朱寿昌は刺血写経をもして再会を祈願するが、その甲斐あつて五十年ぶりの対面を実現させた。この話は、日本では御伽草子『二十四孝』に載せられている。御伽草子は『全相二十四孝詩選』を基にするとされるが、『全相二十四孝詩選』には刺血写経の記述はない。御伽草子が刺血写経の記述を入れた理由には何が考えられるのだろうか。平野顯照氏の研究によって、中国での刺血写経の初見は梵網

経にあり、それが実際に行われた証拠として敦煌文書の中に血で書写した金剛般若経があることが明らかとなっている。また刺血写経が中国の文学に表れ日本にも投影していたことは、嘗て黒田彰先生が指摘されている。本稿は、御伽草子の刺血写経の記述を、受容の問題と併せて考察し、その記述に隠れた二十四孝の姿勢を考える。

キーワード…二十四孝、朱寿昌、刺血写経

—

二十四孝は、様々な時代の孝子で構成されているが、その下限は宋代の孝子である朱寿昌と黄山谷である。二人は、宋の大詩人蘇東坡とそれぞれ友人関係、師弟関係にあり、蘇東坡は、二人が孝子であるこ

とを賞賛している。このことは、二人が二十四孝に取り入れられることになった理由の一つとして考えられ、二十四孝には二人の孝行が記述されているのであるが、二人の孝行は、事実か虚構かという観点からみると、対照をなしている。先に二十四孝の黄山谷の孝行について検討したことがあるが、<sup>1)</sup>黄山谷の母親の搦器(便器)を滌うという孝行は、事実のみえて虚構であり、黄山谷が孝子であることの譬えとし

て史記や漢書等にある万石君の故事が利用されたことから生じたものであると考えられる。それに対して朱寿昌の孝行は、虚構にみえて事実であり、母親との再会を五十年ぶりに果たすといった、「事實は小説よりも奇なり」という諺が当てはまる展開となっている。朱寿昌の孝行のことは、蘇東坡だけでなく他の同時代人も言及している当時大層話題になった事柄で、二十四孝の記述も溯ればそこに帰着するのだらうが、二十四孝の記述は簡潔でありまた孝行の模範を示すという目的もあつたであらうから、二十四孝における朱寿昌の孝行は、事実そのままを記録したものでないだらう。本稿では、二十四孝の朱寿昌の孝行が、どのように記述されているかを検討し、「二十四孝」が形成されてきた過程の一端を推定してみたい。

さて二十四孝の朱寿昌の孝行が各文献にどのように記述されているのか、具体的に見ていくことにする。先ずは日本の文献である御伽草子『二十四孝』「朱寿昌」を上げる(洪川版による)。

七歳生離母 参商五十年

一朝相見面 喜氣動皇天

朱寿昌は、七さいのとき、ち、そのは、ををさりけり。さればそのは、をよくしらざりければ、此ことをなげき侍れども、つゐにあはざること五十ねんにおよべり。あるとき寿昌官人なりといへども、官録をもすて、妻子をもすて、秦といふところへたづねにゆきけるとて、は、にあはせて給へとて、みづから身より血をいだして、きやうをかきて、てんたうへいのりをかけて、たづねたれば、こゝろざしのふかきゆへに、つゐにたづねあへるとなり。

次に、御伽草子の基とされる元の郭居敬が撰した『全相二十四孝詩選』「朱寿昌」を上げる(龍谷大学蔵『全相二十四孝詩選』(禿氏祐祥氏翻刻、全国書房、昭和21年)による)。

朱寿昌

七歳生離母 参商五十年

一朝相見面 喜氣動皇天

朱寿昌生七歳、父出其母、母子不相見者五十年、寿昌行四方求之不已、與人言、輒流涕、熙寧、初棄官入秦、与家人訣誓、不復還、行次同州得焉、劉氏年七十余矣、東坡有詩美之。

『全相二十四孝詩選』は、徳田進氏や大島建彦氏によれば、『小学』外篇によつたものとみられる。次に『小学』六善行篇を上げる(宇野精一氏『小学』(新釈漢文大系、明治書院、昭和40年)による)。

朱寿昌、生七歳、父守雍。出其母劉氏嫁民間。母子不相知者五十年、寿昌行四方、求之不已、飲食罕御酒肉、與人言輒流涕。熙寧初、棄官入秦、與家人訣、誓不見母不復還、行次同州得焉、劉氏時年七十余矣、雍守錢明逸、以事聞。詔寿昌、還就官、繇是天下皆知其孝。寿昌再為郡守。致是以母故、通判河中府、迎其同母弟妹以歸。居數歲、母卒、涕泣幾喪。明拊其弟妹益篤、為買田宅、居之。其於宗族、尤尽恩意、嫁兄弟之孤女二人、葬其不能葬者十余喪。蓋其天性如此。

三つの文献を比較すると、先ずは、徳田氏や大島氏の指摘通り、『全

相二十四孝詩選』と『小学』（波線部）の記述が一致することが確認できる。但し『全相二十四孝詩選』傍線部bは『小学』にはなく、この部分は蘇東坡の詩「朱寿昌郎中、少不母所在、刺血写経、求之五十年、去歲得之蜀中、以詩賀之」を指すとみられる。次に、御伽草子傍線部aが他の二つの文献にはないことがわかる。これもまた、蘇東坡の詩の題の言葉「刺血写経」（傍線部c）を指すとみられ、御伽草子が五山周辺で成立したらしいことを考えると、傍線部bでは示唆されるだけであつた蘇東坡の詩から、御伽草子作者が和訳して本文に加えたのであろう。

朱寿昌が刺血写経をしたことは、蘇東坡が詩の題としていているからには、広く知られたことであつたろうし、後述するが、それが事実に基づいていることは周知のことであつたと思われる。二十四孝関連の文献で刺血写経を記述するのは、御伽草子のほかに、寛文九（一六六九）年版『日記故事大全』三「棄官尋母」（「刺血写榜」）、『孝行録』後賛三十八章「寿昌棄官」（「刺血写経」）があるのだが、なぜ刺血写経は記述されたり省略されたりするのであろうか。この問題を考えるために、まずは朱寿昌の孝行が他の文献ではどのように記述されているのか、また朱寿昌が実際に行つた刺血写経とはどのようなものであつたのか推定してみることにする。

## 二

朱寿昌の伝記は、『東都事略』百十七、『宋史』四百五十六に、『小

学』とほぼ同じ記述の伝記が載せられている。但しこれらの伝記には、『小学』にはなかつた刺血写経の記述があり、『東都事略』「以浮屠法、灼臂焼頂刺血写佛書」、『宋史』「用浮屠法、灼背焼頂刺血写佛経」とあつて、蘇東坡の「刺血写経」よりもさらに詳しく、朱寿昌が仏教の法に頼つたことが明示されている。また『宋史』には「自王安石、蘇頌、蘇軾以下、士大夫争為詩美之」という記述があり、同時代の人物から賞賛されたことも記述されている。これら伝記の記述を参考に、朱寿昌の孝行をまとめてみると、朱寿昌の父朱巽は、妾であつた朱寿昌の母を、妊娠中に他家に嫁がし、朱寿昌が七歳になると、母から離して自分の家へとひきとつた。それから朱寿昌が行方のわからなくなつた母を捜し当てるまでの五十年間、母子は音信不通状態であつた。朱寿昌は、仕官するようになってから四方八方に手を尽くし、仏教の法などにも頼つて母を捜していたが、遂に官職を捨て家族とも別れて母を捜すことに専念した結果、念願叶つて再会を果たした。このことは、皇帝の賞するところとなり、朱寿昌は元の官職に戻ることを許されたが、しかし朱寿昌は、母の家から近い河中府の通判に望んでなつた。朱寿昌は母が亡くなるまでの数年間孝行をして、母が亡くなつた時には失明せんばかりに嘆いた。このことを王安石、蘇頌、蘇東坡等の士大夫が争つて詩に詠んだ、ということになる。伝記では、刺血写経は母親を捜す過程での一つの手段に過ぎず、官職を捨て家族と別れて捜索に専念したことが、母親と再会出来た主な理由となつている。

朱寿昌はまた、同時代の士大夫から孝行を賞賛する詩を詠まれている。それらの詩はかなりの数に上つたらしい。『宋史』には「王安石

……送朱寿昌詩三卷」とある)。(『文獻通考』二百四十九には「送朱寿昌詩三卷」とある。「送朱寿昌詩三卷」は現存しないようであるが、伝えられている詩は、蘇東坡の詩のほか、王安石「臨川先生文集」三十一「送河中通判朱郎中迎母東帰」、司馬光『温国文正司馬公集』十一「贈河中通判朱郎中」、蘇頌『蘇魏公文集』三「送朱郎中寿昌通判河中府」などを確認することが出来る。次に王安石と司馬光の詩を上げる(四部叢刊による)。

『臨川先生文集』三十一「送河中通判朱郎中迎母東帰」

綵衣東笑上帰船 萊氏歛娛在晚年

嗟我白頭生意尽 看君今日更悽然

『温国文正司馬公集』十一「贈河中通判朱郎中」

寿昌侍郎巽之子、襁褓中母劉氏被出、寿昌長而訪之不能得熙寧中

知広徳軍年五十三、乃乞尋醫身自訪求得於同州、為民党氏妻迎以

帰、奏授封邑、寿昌楊州人、以其母子孫俱在同州故折資通判河中

陟配今將老 扶牀昔未行 旨甘無所展 朱紫不為榮

里巷伝呼入 比隣失涕驚 方知貫金石 何以易精誠

王安石の詩は母との再会を祝すだけであるが、司馬光は事情に通じていたらしく、詞書きには、朱寿昌が五十三歳の時に広徳軍の官職を辞して、庶民の党氏に嫁していた母を尋ねあてたことが記されている(傍線部d)。司馬光はまた、彼の日記にも朱寿昌のことを記録していたらしい。『漁隱叢話』後集三十六所引の「司馬文正公日録」を次に上げる(四庸全書による)。

司馬文正公日録云、朱寿昌父任諫議大夫、寿昌母素微、生寿昌歲

余遣出之、因是不知所在、寿昌既長求之、不得乃棄官、尋之刺血書幟以散与人、至是得之于同州迎以帰、錢子飛知永興戰奏其事、乞加旌賞故召之、王介甫方以李定為至孝、故送寿昌赴審官、而寿昌以同母弟妹皆在同州、乃析資授河中通判

傍線部 e・f を見ると、先ず官職を捨てて、それから刺血写経したことになる。そしてまた傍線部 f からは、朱寿昌の刺血写経が、どのようなものであったのか伺うことが出来、朱寿昌は、血で幟を書いたものを、人に配ったのだと推定される(『夢溪筆談』九などからも推定できる)。

司馬光の記録とともに、事情がわかるものとして重要な文献がある。それは文同の『丹淵集』二十六「送朱郎中詩序」である。次に上げる(四部叢刊による)。

熙寧三年庚戌三月癸丑、同自蜀還台宿臨潼華清道館、朱康叔引名見訪、康叔昔守閩中以治祿、同未嘗識之、而嘗相通書也、遇於此尤自喜、問其所以西行之因、康叔欣然謂同曰、不肖不幸少与母氏相失、及今五十年矣、自省事始能得有告之者、然終不能得知其所期于母氏之見也、去歲在広徳一日、若有所感者遂解官、決欲走天下、冀万一或遇之、当先出函谷上雍、宜有得道其迹彷彿殊可信、乃断葷血食刺臂鏤板写副摹仏書鞏散於所經由道、区区祈徹母氏之聽聞、至此累日、又言儻在金州者明日且復如南矣、言罷涕泣嗚嗚……而別至京、未幾聞長安大尹錢公明逸表康叔于朝曰、朱某曩棄官、本縣尋其母、今既得之馮翊矣、宜還之旧秩、且褒寵之以勸激天下、

当時士大夫相逢謹然駭異稱嘆、謂非世之所有在昔亦無幾矣……

皇祐の進士であった文同は朱寿昌と知己の間柄であつたらしく、この文献には、母親を捜している途中の朱寿昌が、文同に語った言葉が記されている。それによれば、朱寿昌は、幼いころに母と別れ、その後五十年会うことがなく、母のことを気にはかけていたものの捜し出す事が出来ずにいたらしい。そして、広徳に居たある日、思うところあつて遂に官職を辞し、仏教の法に頼つて、刺血写経したものを配り歩いたようである（傍線部 g h i）。傍線部 i を見てみよう。なまぐさものを断つて齋戒し、臂を刺して血を出し、仏書を写したものを板木に彫つて刷り、そして、それを担いで行く先々で配り、母が聞き及ぶことを祈つたとある。要するに朱寿昌は、尋ね人の広告文を四方に配り歩いていたのであろう。

配り歩いたからには、広告文は相当な枚数が必要であつたと思われ、血液は原文だけに用いられたか、あるいは墨に血液を混入して広告文を刷つたのではないかと想像される。だが、それでも宣伝効果はあつたのだろうし、朱寿昌の努力も壮絶なものがあつたらうから、奇跡的にみえる母との再会も、当然の結果なのかもしれない。さて、ここで注目したいのは、刺血写経が、母親を捜す単なる一つの手段ではなくて、母親との再会に繋がつた重要な手段だつたということである。それが二十四孝や『小学』では省略されてしまつたのは何故か。

理由はいくつか考えられるであろうが、一つには仏教の問題があつたのではないだろうか。『宋史』や『東都事略』では仏教に頼つたことが記録されていたが、そのことが事実であつたことは、『丹淵集』

の中の朱寿昌の言葉「写副仏書」より明らかである。朱寿昌は仏教の法を用いるのに何ら抵抗は無かつたようであるが、抵抗を覚える者も存在した。『小学』がそうである。『小学』は浮屠法を否定する（永嘉言「世俗言「浮屠誑誘凡有「喪事」、無「不」供「佛飯」僧」など）。そのため『小学』が「刺血写経」を省略するのは当然のことともいえる。そして『全相二十四孝詩選』が『小学』の記述を引用して朱寿昌のことを述べようとしているのであれば、『小学』の仏教を避ける姿勢も踏襲した可能性があるり、それゆえに刺血写経の記述を載せなかつたのだろう。

その他としては「棄官」が考えられる。朱寿昌のことが当時の話題となつたのは、奇跡的な再会もさることながら、一方で李定の服喪問題があつたからだという。李定は新法党である王安石の門人で、実母の喪に服さなかつたことが、新法党と旧法党との抗争と絡み大問題となつたらしい。旧法党である蘇東坡もこのことについて言及しており、例えば先上げた蘇東坡の詩の一節「西河郡守誰復譏」も、暗に李定を批判したものと考えられる。このことからすれば、『小学』にとつて重要なのは「刺血写経」よりも「棄官」なのであり、日記故事系二十四孝の題が「棄官尋母」となっていることをみても、朱寿昌の孝行の重要さが「棄官」にあつたと言えらるだろう。

### 三

『小学』では省略された刺血写経は、母親を捜すための有効な手段

であったことがわかったが、なぜ朱寿昌はこのような手段をとったのであろうか。この問題を考えるに当たっては、刺血写経の存在理由とその実体を明らかにされた平野顕照氏のご論攷「刺血写経について」が示唆に富む。<sup>6</sup> 平野氏が明らかにされたところによれば、刺血写経のもっとも古いとみられる記載は『南史』七梁本紀にあり、梁の武帝が災厄から逃れるために行ったことが記されている。このことは、刺血写経に当初より、朱寿昌の場合と同じく、祈願の意味が込められていたことを伺わせ興味深い。この刺血写経の根源を平野氏は、『梵網経』に求めておられる。次に上げる（大正新脩大藏経二十四巻による）。

四十八輕戒 第四十四番目

若佛子。常応一心受持誦誦大乘經律。剥皮為紙刺血為墨。以髓為水析骨為筆書写佛戒。木皮殼紙絹素竹帛亦応悉書持、常以七宝無價香花一切雜宝。為箱囊、盛經律卷、若不如法供養者。犯輕垢罪傍線部jが刺血写経に該当する部分で、平野氏の説明をお借りすれば、「人体の皮膚を料紙がわりとし、血を刺して墨の代用、脊髓中の液を水の代用、骨を筆の役に用だてて、仏の教を書写すべきである」という意味になる。平野氏はまた『大智度論』巻十六も上げておられる。次に上げる（大正新脩大藏経二十五巻による）。

復次如愛法梵志。十二歳遍閻浮提。求知聖法而不能得。時世無仏法亦尽。有一婆羅門言。我有聖法一偈、若実愛法当以與汝。答言。実愛法。婆羅門言、若実愛法、当以汝皮為紙以身骨為筆以血書之。当以與汝。即如其言破骨剥皮以血写偈如法応修行 非法不応受

今世亦後世 行法者安穩

傍線部kに刺血写経の記述がある。黒田彰先生の指摘によれば、類話に『菩薩本行経』下「優多梨仙人」、『集一切福德三昧経』中「最勝仙人」があり、刺血写経はジャータカを起源とするものらしい。<sup>7</sup> 『梵網経』は鳩摩羅十訳とされていたが、現在では中国でつくられた偽経とする説が大勢を占めていて、『梵網経』の記述は、ジャータカを基に作成された可能性が高い。ここで想起されるのが、『梵網経』の次の記述である。

爾時釈迦牟尼佛。初坐菩提樹下、成無上覺、初結菩薩波羅提木叉、孝順父母師僧三宝、孝順至道之法、孝名為戒、亦名制止。佛即口放無量光明。是時百萬億大衆諸菩薩、十八梵天六欲天子十六大国王。合掌致心、聽佛誦一切佛大乘戒。

傍線部lでは、中国の伝統的な思想「孝」と仏教の思想「戒」が結びついて、遵守されなければならないこととして提示されている。この結びつきが後代の思想にも受け継がれていくことは、道端良秀氏の研究に詳しいので、それを参照していただき、ここでは仏典に「孝」がジャータカを利用して説かれていることの意味を考えてみたい。

『梵網経』の注釈書には、ジャータカなどの説話がしばしば引用されているが、それらの中に、「二十四孝」の孝子譚を想起させる話が見受けられる。それは不瞻病苦戒に例示されることが多い「毘舍母」「如月上女」で、孝行録系二十四孝の「劉明達」「王武子」が各々それぞれに当たると。次に上げる（ジャータカは、大正新脩大藏経四十巻所収『梵網経菩薩戒本疏』五「不瞻病苦戒九」により、孝行録系二十四孝

は『孝行録』南葵文庫本翻刻による。

「不瞻病苦戒第九」

如月上女割乳房以濟產婦。如昆舍母割肱肉以供病比丘等。

「劉明達」

劉明達天性大孝、共妻奉母、時歲大荒、推車載母、遶河陽、在路子侵母食、遂壳其子、妻遂割一乳、与其子、相与、成其孝

「王武子」

王武子河南人也、官遊未回、其妻至孝、姑病危、婦遂默禱、割股与姑食之、其病即瘳、国家知之、遂与母妻封爵

共通点を簡単に示せば、如月上女は、乳房を産婦に与えるが、劉明達の母も売られていく我が子に乳房を与える。また昆舍母は、病気の僧を助けるために自分の股の肉を割いて食わせるのだが、王武子も、病気の母のために同じ行爲をする。これらの共通点は決して偶然に生まれたものではないだろう。なぜならば二十四孝の中には、ジャータカを基とする剡子（郷子、睽子とも）の話があり、道端氏は二十四孝を、「佛教徒のてになつたもの」と推定されている。また偽経である父母恩重経の最古本である丁蘭本には、剡子と並んで中国の孝子である丁蘭・郭巨・董黯が載せられていて、仏家が中国の説話を取り込んだこととは明瞭である。とすれば、ジャータカと中国の説話が結びついたとしても不思議はなく、仏家は、布教のために、仏教本来の説話と中国の説話を折衷させていったのではないかと考えられる。

朱寿昌の刺血写経も、仏家が仏教を中国に迎合するように勤め布教した、その延長線上にあるものだろう。本来、刺血写経は、親の追善

供養として行われることが多かったようである。例えば、次に『鐔津文集』三「輔教編下」広孝章第六を上げる（大正新脩大藏経五十二巻による）。

元徳秀。唐之賢人也。喪其母哀甚。不能自効。刺肌瀝血。繪佛之像。書佛之經。而史氏称之。李觀唐之聞人也。居父之憂。刺血写

金剛般若。布諸其人。以資其父之冥。遽有奇香發其舍。郁然連日。及之其隣。

傍線部 m をみると、母の喪のための刺血写経によつて良い香りが漂つたという奇瑞が起つている。そしてまた『法苑珠林』十八敬法篇の感應縁（大正新脩大藏経五十三巻による）には

唐前大理司直河内司馬喬卿。天性純謹有志行。到永徽中為楊州戶曹。丁母憂居喪毀瘠。刺心上血写金剛般若經一卷。未幾於廬上生

芝草二莖。經九日長尺有八寸。綠莖朱蓋日瀝汗一升。傍人食之味

甘如蜜。去而復生。如此數四。喬卿同僚數人。並向余令陳說。天

下士人多共知之

とあつて、墓所の上に蜜のような甘い汁が滴る草が生えるといった恩恵（傍線部 n）を受けた例もあるのをみると、単に供養というだけでなく呪術としての側面もあつたと思われる。この側面が発展して、民間に根付いていったのだと考えられ、朱寿昌は、それに頼つたのだろう。但し朱寿昌のことを書いた文献からは、朱寿昌が特に熱心な佛教徒であつたとは思われず、朱寿昌の刺血写経は、純粹な佛教信仰ではなく、仏教の底辺を支える民間信仰に属するものとすべきであろう。

四

『源平盛衰記』八の蘇武の説話には次のような部分がある（『源平盛衰記』(二) 中世の文学〈三弥井書店、平成五年〉による）。

蘇武天ニ仰テ歎云、「春ハ北来ノ翅、秋ハ南往ノ鳥ナリ。我旧里ヲモ飛過ラン。心アラバ言伝セン」ト云ケレバ、天道哀トヤ覺シケン、二羽ノカリガネ飛下、蘇武ガ前ニゾ居タリケル。武悦テ指ヲ食切テ血ヲ出シ、一紙ノ文ヲ書ツ、雁ノ翅ニ結付タリケレバ、南ヲ指テ飛行ヌ

蘇武が雁書を指の血でもって書いたという記述（傍線部〇）であるが、延慶本、長門本、八坂本にもある。このことについては黒田彰先生が論究されていて、刺血写経が中国だけでなく日本でも広まっていたことがわかる。また日本文学を注意してみるならば、『保元物語』下「新院御経沈めの事」に崇徳院が（金刀本（日本古典文学大系）による）、

今生はしそんじつ。後生菩提の爲にとて、御指のさきより血をあやし、三年が間に五部大集経を御自筆にあそばされたりけるを、かゝる遠嶋に置奉事痛しければ、鳥羽の八幡辺にも納奉べきよし、御室御所へ申させ給ふ。……斯て新院御写経事畢しかば、御前に積置せて、御祈誓有けるは、「吾深罪に行れ、愁鬱浅からず。速此功力を以、彼科を救はんと思ふ莫太の行業を、併三悪道に抛籠、其力を以、日本国の大魔縁となり、皇を取て民となし、民を皇となさん。」とて、御舌のさきをくい切て、流る血を以、大乘経の奥

に、御誓状を書付らる。「願は、上梵天帝釈、下堅牢地神に至迄、此誓約に合力し給や。」と海底に入させ給ひける。

刺血写経したことが記述されるし（傍線部 p q）、『増鏡』九「草枕」にも（日本古典文学大系による）、

本院は、故院の御第三年の事思し入て、正月の末つかたより、六條殿の長講堂にて、あはれに尊く行なはせ給。御指の血をいだし、御手づから、法華経など書、せ給ふ。僧衆も十餘人がほゞ召しおきて、懺法など読ませらる。御掟の思はずなりしつらさをも、思し知らぬにはあらねど、それもさるべきにこそはあらめと、いよ／＼御心を致して、ねんごろに孝し申させ給さま、いとあはれ也。

とあつて、後深草院（本院）が、父である御嵯峨院（故院）のために、刺血写経したことが記されているのである（傍線部 r）。

つまり、日本文学の中には刺血写経を記述する流れがあり、御伽草子もその中であつて、『全相二十四孝詩選』では記述されなかつた刺血写経の記事を補わずにはいられなかつたのだらうとすれば、御伽草子の中に、日本の二十四孝の姿を、ほんの少しではあるが、見てとることができのではないだろうか。

〔注〕

(1) 拙稿「二十四孝」黄山谷の孝行について—事実と虚構—（『京都語文』9、平成14年10月）

- (2) 徳田進氏「孝子説話集の研究―二十四孝を中心に―」（井上書房、昭和38年）本論前編二章四、大島建彦氏校注『御伽草子集』（日本古典文学全集38、小学館、昭和49年）『二十四孝』「朱寿昌」頭注。

- (3) 詩の注釈については、小川環樹、山本和義氏『蘇東坡詩集』第二冊（昭和59年、筑摩書房）を参照されたい。なお参考までに、朱寿昌のことを詠んだ蘇東坡の詩の全文を次に上げる（『東坡全集』巻四による。他に『東坡詩集註』二十などに載る）。

「朱寿昌郎中、少不母所在、刺血写経、求之五十年、去歳得之蜀中、以詩賀之」

嗟君七歳知念母、憐君壮大心愈苦  
羨君臨老得相逢、喜極無言淚如雨

不羨白衣作三公、不愛白日昇青天

愛君五十著綵服、兒啼却得償当年

烹龍為炙玉為酒、鶴髮初生千万寿

金花詔書錦作囊、白藤肩輿簾蹙繡

感君離合我酸辛、此事今無古或聞

長陵馮來見大姉、仲孺豈意逢將軍

開皇苦桃空記面、建中天子終不見

西河郡守誰復讎、穎谷封人羞自薦

- (4) 徳田和夫氏「二十四孝」誕生前夜『お伽草子研究』（三弥井書店、昭和63年）二篇四章参照。

- (5) 他に『東坡志林』二にも「蔡延慶所生母亡、不為服久矣、聞李定不服所生母、為台所彈乃乞追服」とある。

- (6) 平野顯照氏「刺血写経について」（『書論』10、昭和52年5月）

- (7) 黒田彰先生「蘇武覚書―中世史記の世界から―」（『中世説話の文学史的環境』（和泉書院、昭和62年）Ⅱ-1）。「剥皮為紙、刺血為墨、以髓為

水、折骨為筆」の記述は、『大般涅槃經』十四、『四十華嚴』卷四十の普賢菩薩の十大願にもある。

- (8) 道端良秀氏「五戒と五常との問題―儒教倫理と佛教倫理」『唐代佛教史の研究』（法蔵館、昭和32年）三章六。

- (9) 二十四孝は三つの系統に分かれるとされている。詳しくは黒田彰先生「二十四孝の成立」（孝子伝の研究）思文閣出版、平成13年）Ⅰ-2参照。

- (10) 拙稿「啖子探源―二十四孝成立史のために―」（愛知県立大学大学院国際文化研究科論集）1、平成12年3月）

- (11) 道端良秀氏「二十四孝と仏教 二十四孝押座文について」（『唐代佛教史の研究』法蔵館、昭和42年、二刷）補遺。

（つばい なおこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程）

（指導教授・黒田 彰教授）

二〇〇二年十月十六日受理

